

 書評

 松下正明、影山任佐 編
 現代精神医学の礎Ⅱ
統合失調症・妄想

中安信夫

「彼の臨床観察のおどろくほどの綿密かつ詳細さは、〈中略〉これが精神医学の出発点なのだ、ということであらためて感じさせられる」とは J. カプグラらの「慢性系統性妄想における『瓜二つ』の錯覚」を翻訳した大原貢氏の解説にある一節であるが、この文章ほど評者が本書を読み通して得た、目も眩むばかりの感動を直截に表現しているものはない。

さて、本書、松下正明・影山任佐 編『現代精神医学の礎Ⅱ 統合失調症・妄想』は、今後順次刊行される予定の叢書『現代精神医学の礎』全 4 巻(収載論文は 69 編に上るとのこと)の第 1 回配本として出版されたものであるが、その元は雑誌「精神医学」16 巻 1 号 [1974 (昭和 49) 年] に始まり 1980 年代の終わりまで、一時期は毎号のごとく掲載された(今も時折散見される)「古典紹介」シリーズの諸論文の大半を収載したものである。このシリーズを毎号心待ちした読者は多かったと思われるが、かくいう評者もその 1 人で、ある時思い立ってそのすべてをコピーし、簡易製本にして臨床の折々に参照してきたほどのものである。このたび本書の批評を依頼されて、シリーズ開始の折に何の趣旨説明もなかったゆえに疑問であった本シリーズ企画の経緯を医学書院「精神医学」編集室に問い合わせたところ、当時の担当者から次のような一文が寄せられた。

〈金沢学会以後の混乱が続く中で、精神神経学雑誌をはじめ関連諸学会の機関誌が軒並み休廃刊に陥り、唯一の商業誌だった『精神医学』だけが学術発表の場として存続していました。当時の編集委員の先生方は学会の中核におられた方が多かったので、若手精医連の人たちから不買運動を起こすぞという

投書があったり、掲載論文が反動的とかいう批判を受けたりもしました。そういう状況下で、投稿原稿が大幅に減少し、学会シンポジウムの収録も不可能になったため、急遽誌上シンポジウム形式の特集や連載記事を企画することになりました。特集としては、「医療危機と精神科医」「向精神薬をめぐる問題点」「社会精神医学シリーズ」など、当時の新しい動向を反映したものも組まれました。

そんなとき、内村祐之先生が“今こそ精神医学の原点に帰れ”という意図で「精神医学の基本問題」を本誌に執筆・連載されました。それが大きな反響を呼び、古典を読み直そうという機運が編集会議で高まり、「古典紹介」の企画が成立しました。他にも「先覚者にきく」シリーズもあり、今から想うと混乱期にみられる一種のレトロ現象だったのかもしれない(なお、古典紹介シリーズの担当編集委員は保崎秀夫氏で、ゲストエディターとして宮本忠雄、下坂幸三の両氏が協力されたとのこと)。

この手紙を読んで永年の疑問、謎が解けたが、併せて評者はこの「古典紹介」シリーズがこの現代に装い新たに書籍として出版されたことに、かの時代と現代との共通性を感じ取したのであった。というのは、当時は反精神医学運動、今日は操作的診断基準と極端な medicalization とその内容は異にするものの、精神科臨床が「混乱期」にあるのは同じであり(操作的診断基準と medicalization によって混乱が統一されると見る向きには異なることと思われるかもしれないが、評者にはかえって混乱が生じた、ないし精神医学がその香気を失い、浅薄なものになったとしか思えない)、そこに改めて「精神医学の原点に帰れ」という時代の要請を見て取ることができるからである。この点で、本書の出版はまことに時宜を得た企画と感じ入った次第である。

さて、本書の内容であるが、タイトルにあるように統合失調症 8 編、妄想 9 編、都合 17 編の古典的文献を取り上げて、原論文の翻訳と訳者による解説を掲載するとともに(訳者は 25 名に及び、その中には先の大原氏も含め 5 名の物故者もおられる)、全体にオリエンテーションを与えるべく付された、この第Ⅱ巻の責任編集者である影山氏の「序」と「あとがき」の 2 編の総括的解説から成り立っている。統合失調症の項には E. ヘッカー「破瓜病—臨床精神医学への一寄与」、K.L. カールバウム「緊張病—精神疾患の一臨床類型」、K.L. カールバウム「類破瓜病について」、A. マイヤー「早発性痴呆の力動的解釈」、Ph. シャラン「不統一精神病暫定群」、H. クロードら「早発痴呆と類分裂病、分裂病」、K. シュタウダー「致死性緊張病」、G. ジルボーグ「アンビュラトリイ・スキゾフレニア」と並び、妄想の項には C. ラセーグ「被害妄想について」、C. ラセーグら「二人組精神病あるいは伝達精神病」、J. カプグラ「解釈妄想病」、G. パレ「慢性幻覚精神病/慢性幻覚精神病および人格の解体」、M. フリードマン「パラノイア学説への寄与」、J. カプグラら「慢性系統性妄想における『瓜二つ』の錯覚」、P. ジャネ「迫害妄想における諸感情」、W. フォン・バイヤー「同形妄想について」、G. ドゥ・クレランボー「ふたつの妄想の共存—被害妄想と恋愛妄想」と並んでおり、近代精神医学の形成に寄与した、綺羅星のごとき碩学の代表的論文を一望することができる(なお、上記 17 編の論文は 19 世紀後半～20 世紀前半に書かれたものであるが、そのうち仏語文献は 9 編、独語文献は 6 編、英語文献は 2 編であり、いかにフランスならびにドイツの精神医学界が近代精神医学の形成に与ったかを知らしめている)。

この短い書評においては各論文の内容を紹介するだけの紙数もなく、またその領域の専門家である訳者らの解説に勝るものはないので省略するが、これらの諸論文を一気に読み通した評者の、全編を通じての感想を述べておきたい。

その 1 は、その徹底した「臨床的方法」への圧倒さ

れるような思いである。ここに「臨床的方法」とはヘッカーをして「破瓜病」を書かしめ、自らもまた「緊張病」、「類破瓜病について」を書いたカールバウムの、新たな疾患単位ないし臨床単位を発見していく方法であるが、それは横断的状态像の詳細な記載と縦断的経過の長期にわたる観察を基にしたものである。「これでもか! これでもか!」と言わんばかりの詳細な症例記載、そして 1 例、また 1 例と症例を積み重ねていく中で共通項を見いだしていくというその発見的臨床姿勢は、操作的診断基準が繁用される現代においてとかく失われがちなものであるだけに、教えられるところ大である。このカールバウムと同質の臨床的方法が 17 編の論文すべてに通底しており、「これが精神医学の出発点なのだ」という冒頭に掲げた大原氏の言には、評者のみならず読者も大いに首肯されることと思う。

その 2 は、そうした新しい疾患単位ないし臨床単位の発見を賭けて、同時代人が互いに互いを批判しつつ、また遅れてきた後人が先人の先駆的業績を超克しつつ、なお至るところで共鳴しあって次第にその全貌があらわになってくるという、一大パノラマを見るがごとき近代精神医学形成の大河のごとき滔々としたうねりへの感嘆である。本書に収められた論文はそのいずれもがまさしくその形成の核となったものであり、それだけに今なお読み継ぎ、学べきことの多い基本文献なのである。

以上、本書は評者を「圧倒」し、「感嘆」させたが、ひいてはこの現代において精神医学を学び、精神科医として生きる「喜悦」をももたらしたのであった。こうした心地よさを与えてくれた、編集の任にあたられた松下ならびに影山の両氏に、そしてなによりもおのおのの論文の翻訳・解説の労をとられた 25 名の訳者の方々に、一同僚として感謝の言葉を申し上げたい。

(東京大学大学院医学系研究科精神医学分野)

●A5 591 頁 2009 定価 12,600 円(本体 12,000 円+税) 時空出版